

4/4(日) まいど! 倫理号 対. 申請ありまし 今日の送りに、私も今年倫理の
字にしたい。 最高の言葉で、「心を空にして」一試してみたい。

今週の倫理 1129号 2019.4.13▷4.19

幸世編「アト」鳥

「パーマカルチャー」という概念に倣って、全体を見る
目を養い、事業経営に活かした二つの事例に学びます。

オーストラリアのビル・モリソン氏が提唱した「パ
ーマカルチャー」という概念は、「地球上を森で埋め尽く
す」ことを目的とします。その考え方は、つねに全体を
見る目を持ち、様々な生き物の関係性と役割を把握し、
お互いが活かされ合う環境を目指すというものです。

モリソン氏は「パーマカルチャー」の中で3つの倫理
規定を紹介しています。

①地球への配慮：地球の存在なしに、人間の存在はあ
り得ない。人間は大地の守り人。

②人への配慮：まずは一番近い人への配慮、つま
り自分自身。そしてすぐ隣にいる恋人、家族への配慮。
さらに遠くの空の下、同じ地球の空気を吸っている人
びとへ。

③資源を共有する：他者から奪うことなく、分かち合
う。与え合う。

そして実践方法の一つに、自然のシステムをよく観察
することを挙げています。この観察という実践は、自然
だけでなく、社会を観察することでも有効でしょう。

*

日本に目を向けてみると、パーマカルチャーの先駆者
とも呼べる事例が二つあります。江戸時代と昭和後期か
ら平成時代にかけての事例をご紹介します。



4月のテーマ | 自然賛歌

捨てる物も 活かせば使える

一つは江戸時代、井原西鶴の著した『日本永代蔵』に
あります。元手がなくても、世間をよく見ているうちに、
人が捨てるような材料に貴重な資源があることに気づき、
有効活用して大きな財をなした人物が載っています。

武家屋敷の木工仕事で、一日の終わりに一団が戻る際、
小僧が鉋屑や木つ端を担いで帰路につきます。その際、
桧のきれつばしを落とすのを見て、それを拾い、かなり
の量になり、箸を作ったところ、品質も良く売れたため、
ついには材木屋を営んだという実話に基づいた物語です。

もう一つは、昭和六〇年代から平成初期に、新たな事
業を展開した経営者の話です。捨てられてしまう間伐材
や、製造上の余剰物となる端材に着目し、「自然の資源に
捨てるものは何もない、最後の一片まで使い切る」をモ
ットーに商品化に挑み、「小さな洗濯板」を考案し、大ヒ
ットを生みました。各家庭に洗濯機が普及している現代
でも、出張する人や若い女性に需要があったのです。

この経営者は「酸素や水を育んでくれた木に心から感
謝して丁寧に使い、お客様に喜んでいただける木製品を
創造しお届けしていきます」と、信念を述べています。

『万人幸福の栞』には、「自然は真理の百科事典」「目
を開いてこれを見、口をすすいでこれを味わい、心を空
にしてこれに対する」と、自然に即して生きることで、
正しく導いてくれることを教えてくれます。

私達も、時には、心を空にして、まずはよく観察する
ことから始めてみてはいかがでしょうか。